

特集

循環器の画像診断

Recent advances in pediatric cardiovascular imaging

特集を企画するにあたって

小熊 栄二

埼玉県立小児医療センター 放射線科

Eiji Oguma

Department of Radiology, Saitama Children's Medical Center

本号では『循環器の画像診断』を特集し、各分野の第一線で御活躍中の4人の先生方に総説のご執筆をお願いした。

循環器領域の心エコーや心臓カテーテル検査などの伝統的な画像診断は、小児循環器科医が主体となつてなされる場合が多い。今後もその状況に大きな変化は生じないと思われるが、CT、MRの小児循環器科領域への適応は拡大されつつあり、放射線科においても循環器領域の知識の必要性は増しつつある。また循環器疾患の存在は他の疾患の治療を進める上でも重要な要因となりうるため、他分野の小児科医、小児外科医にとっても、その検査法の進歩について知っておくことは有用であると思われる。

今回の特集から拡大しつつある循環器画像診断のダイナミズムを実感していただけるのではないかと思う。ご寄稿をいただいた4人の先生方をご紹介し、深く感謝の念を表したい。

西島 信先生は、日本胎児心臓病研究会・日本小児循環器学会の胎児心エコー検査ガイドライン作成委員会の中心メンバーとして「胎児心エコー検査ガイドライン」を作成された方である。技術面にとどまらず、その技術的な課題を乗り越えて初めて遭遇する切実な臨床的な問題である倫理面も含めてご解説いただいた。一読させていただき、深く響く多くの問題の存在を教えられた。

金丸 浩先生は多列検出器型CTを用いた高品

位の心臓とくに冠動脈CTを精力的にご研究になっている。素晴らしいのは、他検査と併せて高スループットで実用性の高い検査体制を整えつつ、被ばく低減にも取り組まれていることである。検査体制の有力なモデルを呈示されている。

心臓MRは昭和大学横浜市北部病院循環器センター長の上村 茂教授にご寄稿いただいた。お示しいただいたように心臓MRは機能・心筋性状評価の非常にpromisingな技法であることは間違いない。ただしこのような高水準の検査を行うためのハードルは相当に高いことはよく実感される。このレベルの検査が行える医療機関が少しでも増加するように、心臓MRのあるべき到達水準を示していただいたと感じる。

小児循環器領域におけるカテーテル治療は、私の病院の同僚である星野健司先生に解説をお願いした。当院では年間およそ300例の心臓カテーテル検査を行っており、カテーテル治療の割合も年々上昇している。当院の診療機能の大きな柱であり、それを主導する中核戦力が先生である。このような新しい治療方法は、同時に新しい画像診断の芽が生じていると感じられ、直接携わる機会がない者にも誠に興味深く学ばせていただいた。

たいへん勉強になる価値ある特集になったことを、貴重なご寄稿をいただいた4人の先生方に、日本小児放射線学会雑誌編集委員会を代表してお礼を申し上げたい。